秀賞

わたしはわたしらしく

新潟県妙高市立新井中学校
二年　柿本萌愛

私は人とは違う。そのことがずっとコンプレックスでした。

私は生まれつき片方の耳が小さく、何も聞こえないという病気を抱えていました。十年間、ずっと自分の耳がコンプレックスで、いつも髪で隠していました。小学校低学年のときの友達には、

「もえちゃんの耳って、変だね。」

とからかわれ、小さいながらに、

「自分はみんなと違うんだ。変なんだ。」

と思ったのを今でも覚えています。

みんなと違う耳、人と同じではない耳に産んだことを、親にあたったこともありました。「どうして私はみんなと同じじゃないの？」と……。

小学校四年生の夏休み、初めて耳の手術をしました。胸の下を切り、柔らかい肋軟骨という骨を取り出して形を直し、小さな耳に移植するという形成手術です。手術はおよそ九時間かかりました。手術がおわっても痛みがあったり、熱がでたりと初めて体験することばかりでした。

失うものもたくさんありました。日常生活では、汗をかくと耳の中が蒸れてかゆくなってしまうし、夜は耳をつぶさないように細心の注意を払って寝なくてはなりません。学校生活でも、体育の授業はほとんど見学することになってしまいました。

「もしものことがあってはいけないし、耳への衝撃や圧力を避けるためにもやらないでください。」

と手術を担当してくださった先生に言われたからです。

私には普通のことができない、私は何のために生きているんだろう…と考えてしまうこともありました。一生付き合っていかなければならない、自分の耳が本当に嫌になり、十円玉ほどの大きさに髪が抜け落ちてしまうほどでした。

そして二度目の手術のために入院した小学校五年の夏休み。自分の耳への気持ちを変える出来事がありました。

二度目の手術を終えて病室にいると、一人の女の子が中に入ってきました。その子は私よりも一つ年上で、同じ病気だということを知りました。耳を出す、ショートカットが似合う子でした。同じ病室ということもあって私たちは次第に仲良くなりました。

好きな漫画、趣味、友達など、たくさんの話をしました。いろいろな話の中でお互いの耳の話になりました。私はずっと気になっていたことを彼女に聞いてみました。

「耳、隠さないの？」

彼女は一瞬驚いたような顔をしました。けれどすぐ、けらけらと笑いながら、

「なんで隠すの？　耳なんて誰も見ていないでしょ。」

と言ったのです。

今まで必死に耳を隠していた自分が、急に恥ずかしくなりました。それと同時に、私は私と胸を張り、堂々としている彼女がとても格好よく見えました。

その日から私は髪を伸ばしたり、ショートにしたりと、自分のしたいようにアレンジをするようになりました。小学校六年生で三度目の手術を行い、今では、手術をする前より楽しく毎日を過ごしています。

私の耳は人と違う。でも同じ人間なんていません。私より軽い病気の人もいれば、私より重い病気で苦しんでいる人もたくさんいます。みんな一緒のわけがありません。「人が決めた普通」は、普通なんかじゃありません。私は「私の普通」。私にとってはこの耳が普通なのです。

私は私らしく、この長い人生を精いっぱい生きようと思います。そして周りの人やものすべてに優しさをもった人間になりたい。それが私の一生の目標であり、挑戦です。

作文を書くに当たって

今、この世には残念ながら偏見や差別が当たり前のように存在し、その全てを無くすことは、大変に難しいことです。しかし、減らすことはできます。境遇は一人一人違っても、それを互いに受け入れ、人生をどれだけ楽しむか。それが、この星に生まれた全ての人間に与えられた自由、平等ということなのだと思います。